
魔法少女リリカルなのはStS ~ 白銀の双翼 ~

白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStS ～白銀の双翼～

【Nコード】

N5266L

【作者名】

白夜

【あらすじ】

ティアナ・ランスターが管理局に入る前に葬式で出会った兄の友達、シーマ・フォレスター。六年後、二人は機動六課という舞台上で再び出会う…この作品は本編を原作とオリジナルを加えて構成したものです。

Prologue (前書き)

作者はど素人です至らないところも多々ありますが頑張っ
て執筆していきのでアドバイスなんかあったらよろしくお願
いします

Prologue

「管理局の恥だ」

「死んでも犯人を取り押さえるべきだった」

参列者の誰かがひそひそと話していた。

彼の最後は、新聞の三行に小さくまとめられていた。

もうこれで、永遠に兄と会うことも、話すことも、触れることも、出来ない。

- あたしは許さないわ -

怒りとも悲しみともつかない感情が、胸にうずまいていた。

と、同時に、兄の最後を看取れなかった自分が、どうしようもなく腹立たしく、無力さに絶望したくもあつた。

彼が…次元犯罪者に突き立てた銃は…どのくらい重かったのだろう。彼の流した血液は、いったいどのくらいの量でどれほど痛かったのだろう。

彼は、最後に何を思い、何を見て、逝ってしまったのだろう。

あたしの頭は、思考を止められなかった。

そして、すべての思考の結びには、“何故”という文字が浮かぶ。理由などあたしがいくら考えたところで、きっと兄の苦しみには、無念には、追いつけないのだろうけど…それでも思考は止まらなかった。

でも、彼は、彼が残した衝撃の大きさについて考えたことがあっただろうか。

ここにいるみんなは、大して悲しみの淵にはいない。

時間が経てば、日常に何の影響もないほど、古い思い出にしかならないかもしれない。

それでも、きつと、思い出す。ふとした瞬間に、兄の終わりを思い出す。

少なくとも、あたしと1つ年上のあの人は…

あたしは兄を嘲笑った上司達を許さない。こんな別れは絶対に許さないわ。

兄は懸命に戦ったのよ。次元犯罪者を殺さずに捕まえようとしたのよ。

そして、この結果が、これ？

あなたの周りの人たちは、一生悲しみを抱えていくわ。あなたが大切していた人たちは。

でも管理局の上層部は数年もしない内に忘れていくわ。

ここにいるあたしが、身に着けた黒の色のように、悲しみに沈んでいた。

でも、どれだけ悲しみ、涙を流そうとも、消えた命は戻らない。もう、二度と…

彼の顔は、凄惨な情景とは裏腹に、安らかに微笑んでいた、と聞いた。

「本当に、これで満足？」

だるそうにけぶる線香の、弱弱い煙が、写真立ての彼の笑顔を曇らせた。

あなたがそこからどんなに優しく微笑みかけても…あたしはやっばり許せない。

だから私は兄の夢…執務官になる夢を継ぐ事にした。

そして見返してやるんだ、兄の死を笑った管理局の人たちを。

けど、現実はどうそう上手くはいかなかった

私は兄の友達であり、葬式のとくに唯一兄の上司の暴言に異論を唱えた人 シーマ・フォレスターさんという方を訪ねて、色々な戦闘技術を教えてもらうことにした。

私よりたった1歳年上なだけに凄く強かった。

私のような凡人ではなく、天才の彼が…とても強い彼が羨ましかったです。

彼にどうやったらそんなに強くなれるのかと質問するところ答えた。

私は君の言うような天才ではない、君と同じ凡人だ。ただ1つ違うとすれば、それは…人よりもより多く努力をしたただけだと

私は彼のようにより多く努力をすれば同じように強くなれるのでは

ないかと思った。彼には届かないとしても。

その後、私は管理局に入局した。あれから六年、私は彼と手紙のやり取りはしているけど実際には会っていない。

時空管理局本局執務官 シーマ・フォレスターに

Prologue (後書き)

駄文かつ乱文ではありますが、皆様に楽しんで頂ければと思います。
不定期更新ですが、何とぞ長い目で見てやってくださいませ。

第1話

「確か明日からよね？機動六課に行くのは」

《そつだよ。カリム姉さん》

機動六課へ配属される前日、礼拝が始まる時間と重ならない時刻。明日他の部署に配属されるのに教会という場所に場違いな黒いスーツで身を固め、艶のある藤紫の髪に水色の瞳しているメガネの青年と金色のロングヘアーに、紫の髪留め。黒を基調とした修道服に似た制服女性がいた。

「ここに来ていているという事は明日の準備やはやてへの挨拶は終わってたつてことかしら」

《うん、今日ははやてさんの挨拶と荷物を片付けてからこっちに来たから。で、明日六課の施設や人員なんかを紹介してくれるらしい》

「なるほどね、はやてはちゃんとシーマの事分かってくれてるみたい」

タイミングを計ったように扉をノックする音が聞こえた。

カリムが返事をするると聖王教会の修道女で、カリムの秘書シャツハ・ヌエラが2人分のお茶を持って入っていた。

カリムとシーマの前にお茶を置くと、お盆を抱えたままカリムの邪魔にならないように横に立った。

《ありがとう、シャツハ姉さん》

「これも秘書の仕事ですから」

お互いに微笑むと、カリムはその光景を見て幸せそうにお茶を飲んだ。

《でも実際驚いたよ、上司から機動六課に出向しろって言われた時は。それに推薦者はカリム姉さんとクロノ提督って聞いたとき何事かと思った》

「はやてが身内で有望な人材を探しているって聞いていたから、クロノ提督と相談して決めました。それに部隊の後見人で監査役でもあるクロノ提督は色々忙しいし、私やシャツハも教会からあんまり動けないし・・・貴方には色々と思うけど、それも含めてはやての事助けてあげてシーマ」

《そうだろうと思って了承したよ。それに自分の過去と向き合うには打ってつけの所だし》

「・・・シーマ」

《カリム姉さんもシャツハ姉さんもそんな辛そうな顔しないでよ、ただいつまでも逃げるわけにはいかないだけだから》

そう言っただけで笑うと2人はため息をついて、まるでしようがないなとでも言うような顔をした。

《それにもしかしたらしゃべれるようになるかもしれないしね、一種の希望かな？ずっと念話で喋るわけにも・・・ね？不便だし》

「そうですね、私は見守る事しか出来ませんが・・・」「私もシ

「マの保護者として見守っていますよ？何かあったら連絡を入れてください、すぐに駆けつけますから」

《ありがとうカリム姉さん、シャツハ姉さん》

3人で微笑み合うと、シーマは時間を確認して礼拝が始まる時間が近づいている為帰る事にした。

次の日、シーマは10分前行動をすると真新しい隊舎の前で立ち止まった。

《ここが今日から自分の職場か……》

感慨に浸っているとベルトのホルスターの中から声が聞こえた。

【マスター、今向かえば丁度5分前に着きます】

《そうだね、行こうかパピリオーネ》

胸ポケットからメガネを取り出し、かけると思考を切り替え隊長室へ向かった。

隊長室前に着き、ドアをノックすると中から声が聞こえた。ドアノブを捻り、入っていった。

中に入るとテーブルの前まで移動して敬礼をした。

《本日只今よりシーマ・フォレスター執務官、機動六課へ出向となります。どうぞ宜しくお願いします》

その言葉を聞くとはやてもイスから立ち上がり敬礼をした。

「こちらこそ宜しくお願いします……とまあ、硬い挨拶はこれくらいにして取りあえずは久しぶりやね、シーマ君」

《こちらこそ久しぶりです、はやてさん。まさか自分が機動六課に送られるとは思いませんでした》

「こつちもや。でもシーマ君やから問題ないよ？当てにしてるから頑張つてや」

《はい！》

「シーマ君には主にライトニング部隊の指導とフェイト執務官の補佐をしてもらいたいんよ。ライトニング分隊の副隊長シグナムは交替部隊の部隊長をやってもらっているし、隊長のフェイト執務官も機動六課では法務担当と広域捜査の主任やから捜査官という役柄隊舎を空けることが多くて、しかも新人4名用新デバイスの設計に協力もしているんよ」

《了解しました》

「そうか、ありがとう。……じゃあ次は六課の施設や人員を紹介するよ。着いてきて」

それからはやての案内で建物の中を見ると、外へ向かった。

「そして今あそこで訓練しているの場所が陸戦用空間シミュレータ。海上に張り出す形で設置されていてな市街地から森林まで様々な状況を再現する事ができる上に対AMF戦訓練も実施可能になっているんよ、どうや凄いやろ?」

《はい、これが一番驚きました》

その感想に満足すると、はやてとシーマはなのは達の訓練が終わるのを待つと近づいていった。

「なのはちゃん、訓練終わった?」

「はやてちゃん?うん、今終わった所だけど……」

そう言うてはやての隣を見た。

「この人がはやてちゃんの言ってた?」

シーマは敬礼をすると互いに自己紹介をした。

最初は念話で驚いていたようだったが、失声症と言うと納得したようだった。はやてはなのはに任せると隊長室に帰っていった。

そしてシャーリーやヴィータなどに自己紹介をし終わると、フォワードメンバーの自己紹介となった。

《本日付で機動六課ライトニング分隊副隊長に任命されました、シーマ・フォレスター執務官です。失声症により念話でしか話せませんが、いたらない点などありましたらどうか言ってください、皆さんよろしくお願ひします》

「ティ、ティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「スバル・ナカジマ二等陸士であります！！」

「エリオ・モンディアル三等陸士であります！！」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！！」

なのはがパンパンと手を叩き、朝練を終了させると先にフォワード陣とシーマは昼食を取ることになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5266/>

魔法少女リリカルなのはStS ~白銀の双翼~

2010年10月9日23時33分発行